

BM, tonofilament を認めた。Microvilli には coating material を認めた。

これらの所見は epithelial cyst の所見でしかも respiratory epithelial cyst の性格を有するものと考えられる。

8. Bellini 管腫瘍の 1 例

(腎センター・泌尿器科)

伊藤 文夫・鬼塚 史朗・柳沢 博・
龍谷 修・中村倫之助・中沢 速和・
東間 紘・太田 和夫

(目的) 極めて稀な Bellini 管由来と考えられる腎腫瘍の 1 例を経験したので報告する。

(症例) 63歳男性。慢性腎不全があり、5年前から血液透析を続けている。本年5月、突然血尿が出現し、当センターを受診した。尿細胞診で class V、また逆行性腎盂造影、CT 等の画像診断で右腎腎盂腫瘍が疑われ、6月13日右腎・尿管全摘術が行われた。摘出腎は、大きさ7.5×3.5×3.0cmで、特に皮質が萎縮し、上極髓質に径1cm、割面暗黄色、充実性腫瘤を認めた。光顕上は、clear cell に比べ N/C 比の大きい円柱状上皮による、乳頭状および管腔状構築が認められた。更にレクチンおよびモノクロナル抗体を用いた特殊染色を行ったところ、下部ネフロンに染色特異性を有す PNA, SBA, DBA, EMA で陽性となり、遠位尿細管に染色特異性を持つ THP では陰性となった。

これらの結果は、本例が遠位尿細管以後の下部ネフロン発生の腫瘍であることを示唆している。

9. 長期間原発巣が不明であった転移性皮膚腫瘍の 1 例

(皮膚科) 森田 久美・豊田 裕之・
川島 真・肥田野 信
(第 1 病理) 河上 牧夫
(消化器内科) 雨森 明・
田所 洋行・小幡 裕

70歳、男性。右下眼瞼に結節を生じたものの、1年半にわたって無症候性に経過し、突然、腹水の貯留を来し、諸検査より胆嚢癌の存在が明らかになり、先行した結節がその皮膚転移と判断された。

組織像：HE 染色では腫瘍細胞が真皮全層にわたり膠原線維間にびまん性に、一部は結節状に認められ、比較的大型で、弱好酸性の胞体を持ち、核は中型でクロマチンに富み、一部に明瞭な核小体を持つものも認められた。さらに、印環細胞様細胞、泡沫細胞様細胞、好酸性の細顆粒を持つ細胞が混在していた。ズダン染

色、S-100染色陰性、PAS 染色、CEA 染色陽性、電顕では胞体内に種々の電子密度の粘液顆粒と思われる多数の顆粒を有し、微絨毛を細胞膜表面に有する細胞と、少数の顆粒しか有さず絨毛の発達も悪い細胞が混在していた。

10. 卵巣悪性中胚葉性混合性腫瘍 3 例の臨床病理的検討

(産婦人科) 島 由美子・
滝沢 憲・古市 郁子・佐藤美枝子・
井口登美子・武田 佳彦

(病院病理) 平山 章

卵巣に発生する中胚葉性混合性腫瘍は極めて稀な疾患であるが、当科では過去5年間に2例を経験し、新たに1例を経験したのでこの3例の臨床像および病理組織をまとめて発表する。

3症例はいずれもその臨床像が類似し発症が60歳代であり、主訴は巨大腫瘍による周囲臓器への圧迫症状であった。リンパ節腫大は特徴的で、両側の水腎症と尿管が存在していたことより腫瘍は後腹膜を浸潤していったことが示唆される。Labo data では LDH, CA125 が高値を示し、CA19-9 は正常であった。開腹所見も共通して腫瘍が骨盤から腹腔内へ発育し、その表面には S 状結腸、回腸が浸潤性に癒着していた。予後は極めて不良でいずれも半年内に死亡した。

病理組織では前回の2例は上皮性については未分化腺癌と類内膜癌で、非上皮性については未分化肉腫で homologous な MMT であったが、今回の症例は、非上皮性組織に軟骨肉腫などを含むので heterologous な MMT と診断した。

11. 動物の自然発生腫瘍 1. イヌの悪性黒色腫の 1 剖検例について

(実験動物中央施設) 金井 孝夫・小山 生子
(ダクダリ動物病院文京病院) 伊藤 弘一
(第 2 病理) 西川 俊郎・笠島 武

イヌのメラノーマの 1 剖検例を報告する。症例は、年齢11歳、♂のヨークシャテリア。昭和61年6月初診、左肩部に径1cmの黒色腫瘍、X線像で心基部、肺に結節陰影あり、悪性黒色腫とその肺転移の疑いで入院、経過観察した。その後、肺炎、左側運動神経症状が発現、入院後31日で死亡。死後12時間で剖検を実施した。腫瘍は、皮膚のほか内臓諸臓器に広汎に転移を認めた。原発部皮膚腫瘍は、dermis から皮下にかけ結節状で増殖し、腫瘍は胞巣構造をとり、うすい結合織に囲まれ、周囲に浸潤性増殖を示し、中心部は壊死性であった。